「主の御計らいを数える時」

詩編１０３篇１－５節

森島　牧人　牧師

先回の礼拝の中で、今日の御言葉の詩篇１０３篇を交読しました時、私は「数えてみよ主の恵み」という讃美歌の歌詞と一人の日本人の女性宣教師のことを思い出しました。

超教派のグループからインドネシアのカリマンタン島に派遣された安東栄子宣教師は、「インドネシアの宣教はインドネシアの人の手で」とのヴィジョンを持ち、宣教に励みながらカリマンタン島に神学校を作られたのでしたが、１９９０年1月９日、その神学校から第一期神学生が世に送り出された喜びの卒業式の帰途、４０歳で交通事故死されたのです。遺品の中から日記が見つかり、「安東栄子宣教師遺稿集」として出版されましたが、そこには「１９８９年も風のように過ぎ去ってしまった。私の歩んで来た道の何と険しかったことか。でも私の前にはっきりと神の御手の跡が見える。神の恵みの数々を数えてみよ。・・・私は汚れた罪を犯しましたけれどあなたの赦しは私を浄めてくださった。赦し続けてくださった。・・・人生がもうこの歳で終わってもいいと思うほどです。何も思い残すことがないのです。」と書かれていたのです。人生の豊かさはその長さではないことを改めて思わされますが、師の死をきっかけに神学生たちは事故のあった近くの町で伝道を始め、今ではその町に教会と三つの伝道所があり、神学校では１５０名が学んでいると言います。イスラム教徒が殆どという中での宣教は困難を極めたに違いありませんが、師は「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」（ヨハネ１２：２４）との御言葉そのままに、カリマンタン島に一粒の麦を蒔かれたのでした。

さて、感謝と賛美の詩と呼ばれ、＜聖書信仰の木に咲いた最も清らかな花の一つ＞と言われている詩篇１０３篇は、かつて罪の中にあった詩人が赦されて恵みの中に入れていただいたことを喜び歌ったもので、「わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこぞって　聖なる御名をたたえよ。」と始まっています。ここで詩人は全身全霊をもって主を賛美することを自分に命じています。心だけでは不十分で、身体のすべての臓器に主を賛美せよと命じているのです。２節では、「わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。」と自分を諭しています。原文では＜御計らい＞は１０節の＜報いる＞と同じ言葉で、新改訳聖書では「主が良くしてくださったことを何一つ忘れてはならない」となっています。ここで教えられるのは、安東栄子師の日記にもあるように、主は私たちが良い行いをしたから御計らいをしてくださるのではなく、主に対して悪い者である私たちを咎めることなく、慈しみをもって取り計らってくださるということです。にもかかわらず人間はすぐにそれを忘れる、ゆえに今日まで神からいただいた恵みの一つ一つを、新しい記憶の中に呼び起こせと詩人は自分に厳命しているのです。

３－５節には「主はお前の罪をことごとく赦し　病をすべて癒し　命を墓から贖い出してくださる。慈しみと憐みの冠を授け　長らえる限り良いものに満ちたらせ　鷲のような若さを新たにしてくださる。」とあって、御計らいの内容が具体的に示されています。私たちの心の中で最も強く重く私たち自身を支配する罪・病・死・生活の糧、それらのすべての面に於いて主の愛は決して欠けることなく、むしろそのような面に於いてこそ、主の恵みは輝くと詩人は歌っているのです。この、主の御計らいを数える時、先ず最初が罪の赦しであるとの詩人の思いは、私たちに大切なことを教えています。神が罪のことごとくを赦してくださったことの中にこそ最大の恵みがあるということ、つまり主の道から逸れるという罪を犯し、主を忘れることの多かった者であったにもかかわらず、主は変わらぬ愛をもって私たちを赦し、立ち返る日を待ち続けてくださった、そのことを先ず神に感謝しよう、そして神を賛美しようと詩人は言っているのです。

この詩編１０３篇は、讃美歌、新生讃美歌、聖歌となって、多くの人に愛されています。これから賛美する新生讃美歌１０３番もこの詩がもとになっていますが、この讃美歌を作ったエドウィン・エクセルは、ドイツで左官をしていたのですが、讃美歌に強く惹かれてアメリカのシカゴで学び、生涯に二千曲のゴスペルソングを作って、アメリカで伝道した人です。「あなたに賜った恵みを数えなさい」という題の彼のこの讃美歌を多くの人が賛美し、生きる希望を得たと言われています。私たちもこれを賛美し、私たちに良くして下さった神の恵みを数えながら、生きて行きたいと思います。

（説教要約　羽入田悦子）